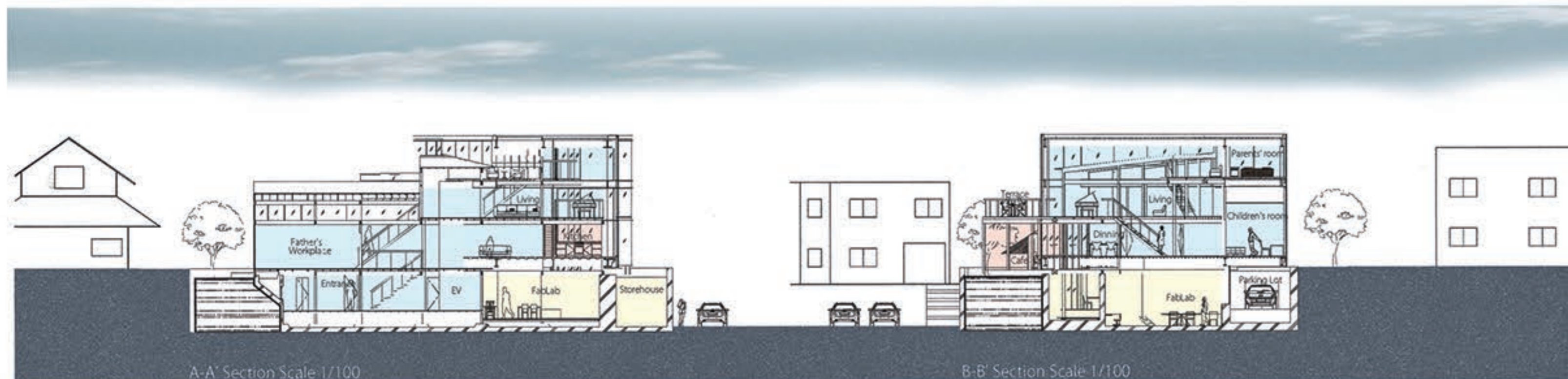


- Epicenter as a real space in the suburbs -

「 commons 」の出現によって情報空間と実空間への行き来が活性化され都市にアクティビティとして還元されるようになったがそれを置換するインターフェースが都心に偏ってしまっているため都心と郊外で情報空間からの利用に差異が生まれてしまっている。エピセンターとして都市・郊外、情報空間・実空間をつなげる複合住宅を提案する。

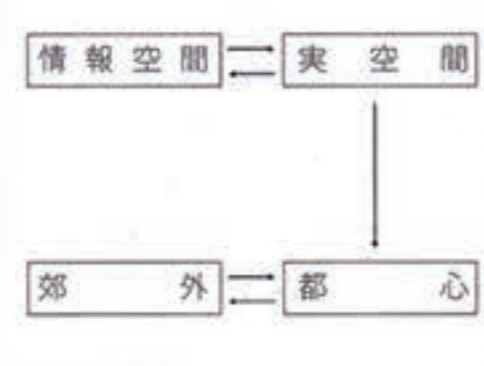


■1. フィジカル空間によるものづくりの変化



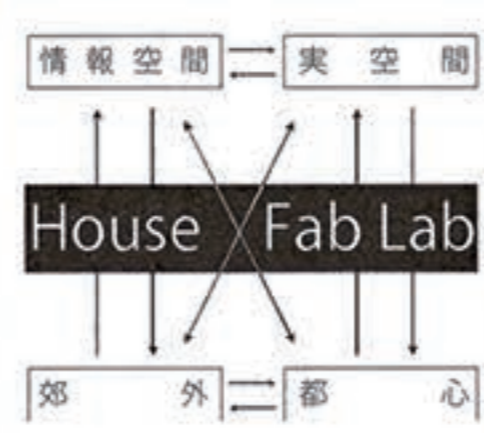
デジタルファブリケーションの発展によって、デジタルとリアルとも全く異なるものづくり空間（フィジカル空間）が出現している。「もの」と「情報」が交互に行き来可能になり、ものとは情報とは一体不可分の関係となった。そして、情報、通信、製造の全てが誰でも必要なものを必要な量だけつくることのできる社会的な動きがみられるようになってきている。このような動きによって、生産者と消費者の概念が大きく変化してきており日常生活に取り込むことで大きな変化をもたらすのではないかと。

■2. 都心と郊外



このようなものづくり空間として、FabLabといった工房とコミュニティ施設を一体化したようなビルディングタイプが現れ始めた。ただし、情報空間がどこでもアクセス可能なのに反して、実空間ではつなぐためのインターフェースがある場所に限られてしまっている。これによって情報空間の特性が実空間へ還元出来ず、またその図式が都心と郊外として表れてしまっている。

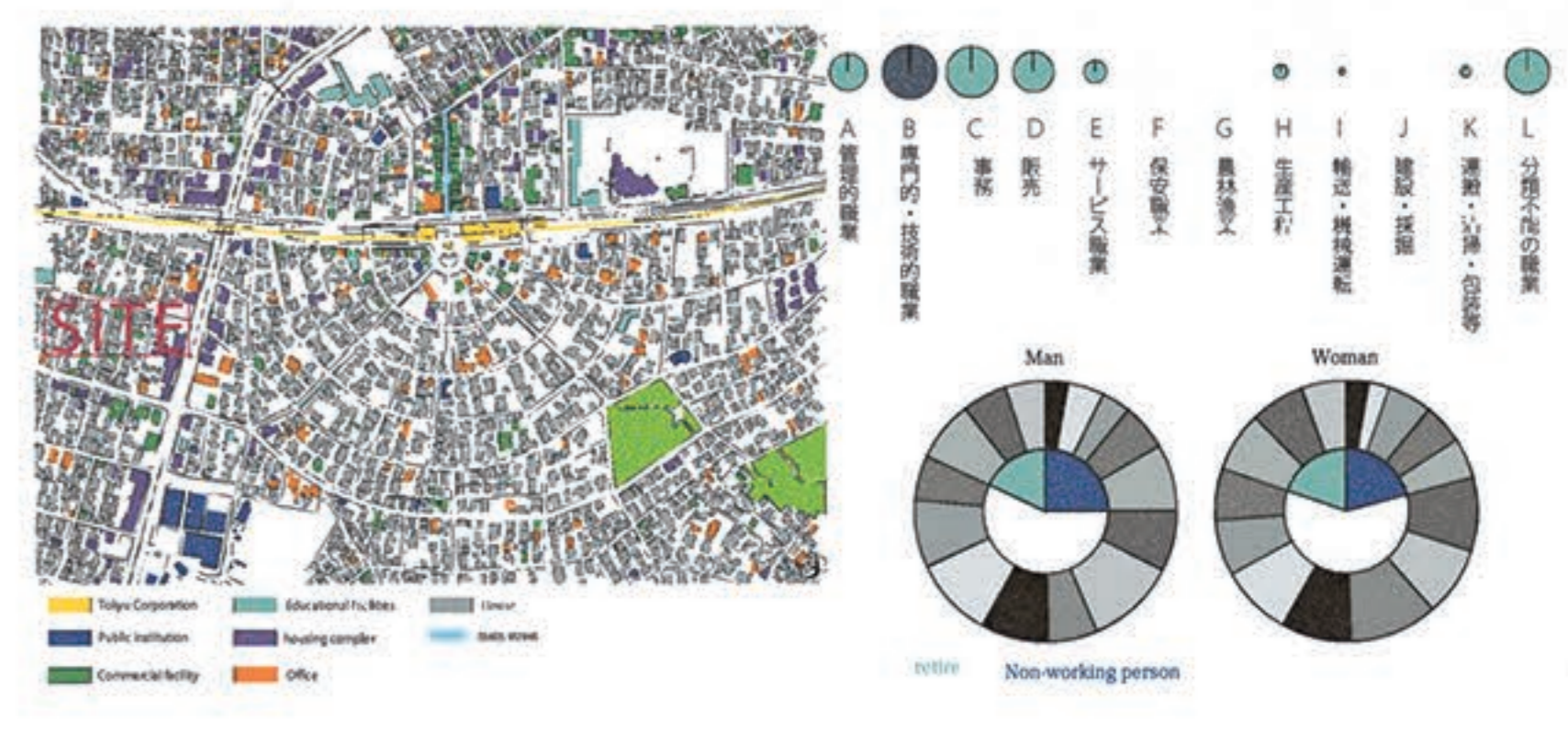
■3-1. 提案



そこで、住宅地である郊外にエピセンターとしてFabLabとの複合を考える。敷地は、東京都世田谷区玉川田園調布で、沈黙一層によって開発された住宅地である。ここは、土地の高層により住民の入れ替わりが多いため、住宅構えとして卵が用いられるのが特徴であり、長く住み着いている人と引越してきた人との交流が生まれにくい環境であると言える。郊外住宅地の交流の場として、都市・情報空間の結節点としての住宅を提案する。

■3-2. 郊外としての玉川田園調布

郊外住宅地の問題として、駅前に公共性の高いビルディングタイプが計画され住宅地の方面はほとんどが住宅で構成されており人々が集まることのできる場所がないことが挙げられる。それは、全国的に見られる高齢者といった非就労者が増えつつある状況の中で負担となっている。ただ、その非就労者の多くが技術的職業に就いており、積極的に地域に参加できるポテンシャルを持っている。このポテンシャルを活かす郊外のエピセンターとして都市・情報空間を繋げる役割をもつ複合住宅を計画する。



■3-3. Composite, form and activity

住宅とFabLabの複合を考える。住宅において、近代から現代にかけて様々なプログラムと複合することで住宅に新たな価値を見出そうとする試みが為されてきた。ただし、現代は多様な時代である。近代に生まれたビルディングタイプを重ね合わせることで新たなビルディングタイプが多く生み出されている。FabLabもその一つであると言える。そして、その現代的なビルディングタイプを扱うことで住宅に新たな価値を見出せるのではないかと。

ここで、FabLabというビルディングタイプを近代のビルディングタイプ言語へ置き換え形式に変換し住宅の形式と組み合わせ再構築する。FabLabは工場と公民館といった二つのビルディングタイプの掛け合わせと現代の技術によって生まれたのではないかと。そして、それらの物質的・群としての形式をアクティビティに還元しながら現代の情報化に対応した郊外としての集まり方・住み方を提案する。

